

報 告

妊娠・出産・育児による母親のパーソナリティと
母性形成に関する研究鳥澤 ゆい¹⁾, 渡辺 恭子²⁾, 川瀬 正裕²⁾

〔論文要旨〕

本研究では、出産・育児を経ることによって母性意識がどのように経時的に変化していくのか検討することを目的とし、0歳から3歳程度の子どもをもつ母親10人を対象に半構造化面接を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる検討を行った。得られたカテゴリー間の関係性について、母親のパーソナリティが育児を通して変化していくことで経時的に母性が形成されると考えられた。一方、一般的に育児ストレスの要因として挙げられているサポート不足は、母親のパーソナリティとは関係しなかった。しかし、周囲からのサポートは子どもに対するポジティブ・ネガティブ感情と関係し、それらの感情が出産後のパーソナリティ変化や母性形成と関係すると推察された。

Key words : 母性形成, 育児サポート, ストレスコーピング, 母親パーソナリティ,
グラウンデッド・セオリー・アプローチ

I. 緒 言

近年の育児ストレス・育児不安研究の動向を見ると、保護者・子ども・養育環境がその要因として挙げられ、その全体の数は増加している¹⁾。中でも児童虐待の問題は多く取り上げられ、厚生労働省は、「虐待に至る前に、気になるレベルで適切な支援が必要（育児の孤立化、育児不安の防止）」であるとし、虐待の発生予防を課題に挙げている。また、虐待者別の内訳から、実母が59.2%と最も多く、母親への子育て支援が重要であることがうかがえる。このことから、本研究では、育児における問題の中でも、特に子どもと関わる頻度の高い母親に焦点を当てることとする。

先行研究では、個人の特性は母性や否定的精神に影響すると報告され、個人の特性によって家庭でのストレスや育児効力・満足感に違いがあるとされている²⁾。また、特に母性的要因について、「低い母性

感情は、母子相互交渉の際にも影響を及ぼし、育児不安の一要因となる可能性がある」とされている³⁾。さらに、育児ストレスに対する要因として母親のパーソナリティが最も影響すると報告されている⁴⁾。加えて、育児ストレスを特徴づける要因として、「育児の理想と現実に対する不安」と「アイデンティティの喪失に対する脅威」などにみられる母親自身のパーソナリティから生じるストレスがあるとされる⁵⁾。また、出産体験と自尊感情の関連について、自尊感情が高い母親は自分が出産時に上手く振る舞えたと評価する傾向があると報告されている⁶⁾。これらの先行研究から、育児に関する問題について、母性意識のほかに、母親の自尊感情や特性が関係していると考えられる。なお、本研究では、「母性形成」という用語に「母性意識の変化」という意味を含めるものとする。また、「パーソナリティ」について、母親がもともと持ち合わせている特性に加え、妊娠・出産・育児に関する態度を扱

A Study on Mother's Personality and Motherhood Formation by Childbirth and Child Care

〔2882〕

Yui SHIMAZAWA, Kyoko WATANABE, Masahiro KAWASE

受付 16.10.20

1) 金城学院大学人間科学部多元心理学科（非常勤講師／保育士）

採用 18. 1.12

2) 金城学院大学人間科学部多元心理学科（研究職／臨床心理士）

うこととする。

また、先行研究では母親へのサポート不足が挙げられている。例えば、夫がいるにもかかわらずサポートを得ることができない群（サポート Low 群）の方が、夫のサポートに対して初めから期待していない群（ひとり親群）よりも育児に対する心理的な負荷が高いと報告されている⁷⁾。一方、サポートが多いほど心の健康度は高くなるとされ、母親の自己効力感を高め周囲の人の情緒的サポートを得ることの必要性が報告されている⁸⁾。さらに、得られ難いサポートが得られることは妊婦にとって肯定的要因となり、母性意識の発達が促されると報告されている⁹⁾。

このことから、育児に関する問題では、母性意識や母親のパーソナリティ、母親へのサポートがさまざまな要素となり、育児困難感に密接に関わっていると推察される。そこで、本研究では、妊娠・出産・育児を経て母親のパーソナリティや母性意識がどのように経時的に変化していくのか、妊娠・出産・育児に関する態度は母性形成や育児におけるサポートとどのような関係があるのか検討することを目的とする。

II. 対象と方法

研究の調査期間は2014年2～8月の7か月間である。研究対象者は、A 大学関係者およびB 市クリニックへ来院した0歳から3歳程度の子どものをもつ母親10人であった。倫理的配慮として、クリニックの担当者に調査目的を文書で説明して理解を得た。また、対象となる母親には研究の目的・方法とプライバシー保護等について口頭で説明し、理解、同意を得たうえで前記内容を明記した同意書に署名を求めた。本研究は、ヒトを対象とする研究に関する倫理指針に基づき、金

城学院大学大学院人間生活学専攻倫理委員会の承認を受けて実施した。分析方法は、経時的変化を質的に検証するため、母親の妊娠・出産・育児における子どもや自分自身、生活環境の変化などに関する半構造化面接を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチによる検討を行った。

インタビューの質問内容は、①自分自身の性格について（短所と長所）、②妊娠・出産前までの子どもに対する印象、③妊娠に対する感想、④妊娠中の不安や戸惑い、⑤妊娠・出産時に受けたサポート、⑥妊娠・出産時にしてほしかったこと、⑦妊娠期間中の自分自身の変化、⑧子育てにおける大変さや困ったこと、⑨育児困難感への対処方法、⑩子育て中に受けたサポート、⑪子育て中にしてほしかった（してほしい）こと、⑫子どもが可愛いと思う時、⑬育児を通しての自分自身の変化、⑭子どもとの類似・相違点、⑮母親としての実感の15項目を設定した。なお、インタビュー中、対象者の子どもは傍で遊んでいたり母親に抱かれていたりするなどして、自由に過ごしていた。

III. 結果

1. 研究対象者の属性

本研究の有効回答は10人であった。うち、第1子のみをもつ母親が5人、第2子以降をもつ母親が5人であった。母親の平均年齢は30.20 (±3.12) 歳であった。対象者の属性を表1に示す。

2. インタビュー内容に関する結果

インタビュー内容を「子ども」、「母親」、「養育環境」の観点から分析した結果、3個のコアカテゴリーと7個のカテゴリー、13個のサブカテゴリー、カテゴリー

表1 対象者の属性

| 対象者 | 年齢 | 子どもの数と年齢 | 仕事 | 妊娠 | 出産 |
|-----|----|----------------------------------|----|----------|---------|
| A | 30 | 第1子(2歳半) | あり | 強く希望 | 自宅・実家近辺 |
| B | 30 | 第1子(2歳), 第2子(9か月) | なし | 希望 | 自宅・実家近辺 |
| C | 31 | 第1子(3歳9か月), 第2子(1歳9か月), 第3子(4か月) | あり | 希望 | 立ち会い |
| D | 30 | 第1子(2歳) | あり | 希望 | 自宅近辺 |
| E | 33 | 第1子(3歳), 第2子(1歳) | なし | 強く希望 | 自宅近辺 |
| F | 24 | 第1子(6か月) | あり | 希望 | 里帰り |
| G | 33 | 第1子(1歳4か月) | なし | 希望(不妊治療) | 自宅近辺 |
| H | 34 | 第1子(6歳), 第2子(1歳1か月) | あり | 希望(不妊治療) | 里帰り |
| I | 26 | 第1子(1歳4か月) | なし | 希望 | 自宅・実家近辺 |
| J | 31 | 第1子(4歳), 第2子(9か月) | なし | 希望なし | 里帰り |

表2 母性意識の変化と育児ストレスの要因 (子ども要因)

| コアカテゴリー | カテゴリー | サブカテゴリー | 概念 | 具体例 |
|---------|----------------|-----------------|--------------|--|
| 子ども要因 | 子どもに対するポジティブ感情 | 妊娠・出産前のポジティブな印象 | 妊娠前のポジティブな印象 | A: 公園とかで遊んでる親子とか見ると子育て楽しそうだなって B: 子ども大好き。一緒に遊ぶのに憧れ B: 子どもほしいなあって思ってた D: いつかは子どもをもちたい E: かわいいものだなって、ただ単純にかわいい F: 早くほしいな G: 大好きでした |
| | | | 妊娠に対する喜び | A: うれしかった。ずっとほしいなと思っててよかったなあって、子どもがほしかったのでわくわくしました B: 驚いた部分もあったけど、うれしかった F: 結婚前でどうしようかっていうのはありましたけど、うれしかったです G: ただ茫然として、あとからじわじわうれしく |
| | | 出産後の子どもの印象 | 子どもはかわいい | A: にこにこしている時 (かわいい) B: 一緒に笑ってる時。くっついてきてくれる・抱っこをせがんでくる F: 笑いかけてくれる G: 寝顔・寝てる姿って安心する |
| | 子どもに対するネガティブ感情 | 妊娠・出産前のネガティブな印象 | 妊娠前のネガティブな印象 | C: 生まれたらかわいいだけじゃないだろうな H: あんまり好きじゃなかったです。あんまり興味ないって感じで J: 結婚しても子どもがほしいと思ってなくて、かわいいけど別って感じでした。子どもができるまでは好きじゃなかった |
| | | | 妊娠中の不安や心配 | D・E・G: 無事に生まれてくるか不安になった H: 高齢出産 J: こんな私が育てられるのかなって |
| | | 育児に関する困難感 | 子どもに対する困難感 | A: 自分の思い通りにいなくなる C: 言うことを聞かない D: 他の子ができることがうちの子はできない E: アレルギーがある F: 目が離せない I: 話がうまく通じない |
| | | | 生活面の困難感 | B: 家と子どものことで自分の時間がない F: 夜も関係なく頻回の授乳 (眠れない) |

アルファベットは表1の対象者を意味する。

を構成する24個の概念が抽出された。以下、カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを [], 概念を< >, 対象者の話した具体例を「 」で示す。

i. 子ども要因

子どもが要因であると考えられる母性意識の変化や育児ストレスについて、コアカテゴリーとカテゴリー、具体例などを表2に示す。

子どもに対する印象について、「子どもが大好き」、「かわいい」、「早くほしい」という印象は、<妊娠前のポジティブな印象>を構成している。また、「(妊娠して)うれしかった」、「よかったなあ」、「わくわくした」という妊娠に対するポジティブな感情は、<妊娠に対する喜び>を構成している。この結果、<妊娠前のポジティブな印象>と<妊娠に対する喜び>は[妊娠・出産前のポジティブな印象]としてまとめられた。また、「にこにこしている時 (かわいいと思う)」、「抱っ

こをせがんでくる」、「寝ている姿を見ると安心する」というわが子をかawaiiと思う時は、<子どもはかawaii>を構成している。そして、<子どもはかawaii>と思う感情については、[出産後の子どもの印象]としてまとめられる。妊娠・出産前に感じていた子ども全般に対する印象と、出産後の自分自身の子どもに対してもつ感情は同様にポジティブなものであり、[妊娠・出産前のポジティブな印象]と[出産後の子どもの印象]は、【子どもに対するポジティブ感情】としてまとめられた。

一方、「子どもがほしいと思ってなくて」、「あんまり興味ないって感じ」、「好きじゃなかった」という子どもに対する印象は、<妊娠前のネガティブな印象>を構成する。また、「無事に生まれてくるか不安になった」、「こんな私が育てられるのかな」という妊娠に対する不安や心配は、<妊娠中の不安や心配>を構成す

表3 母性意識の変化と育児ストレスの要因（外的要因）

| コアカテゴリー | カテゴリー | サブカテゴリー | 概念 | 具体例 |
|---------|------------|-------------|----------------|--|
| 外的要因 | 外的サポートへの満足 | 妊娠・出産時のサポート | 妊娠・出産時の心理的サポート | B: 母が話し相手になってくれた C: 旦那が出産に立ち会ってくれた E: 旦那さんの職場の人が話を聞いてくれる F: 出産の時についててくれた |
| | | | 妊娠・出産時の物理的サポート | A: 職場の人にすごいよくしてもらった B・C・D・E・H・I: 家事をしてくれた C: パパママ教室, パパに体験させたくて |
| | | 育児中のサポート | 育児中の心理的サポート | B: 交流館でほかのママと話ができる D: 児童館で自分自身の気分転換 |
| | | | 育児中の物理的サポート | A: 両親がよく見てくれる。親子体操に行く D: 児童館で保育士さんに遊んでもらう F: 旦那が遊んでくれると、家事ができる E・G・H: 近所の人がちょっと見ててくれた H: リフレッシュ保育で一人の時間 |
| | 外的サポートへの不満 | サポート不足 | 妊娠中のサポート不足 | A: 妊婦の集まりだとか、コミュニケーションとれる場があったらよかったな B: 旦那さんには早く帰ってきてほしかった H: 家事の手伝い I: 夫にもうちょっと手伝ってもらいたい。旦那の家事が中途半端 |
| | | 育児中の不満 | 他者への不満 | B: 電話相談とかあったらよかったなあ C: 親子ひろばとか無料だともっと使えるのに D: 児童館に保育士さんいる時間が短い E: 遊べるところが少ない G: 家事をしている間の託児・ベビーシッター 自分が熱を出した時頼れる人がいない I: 旦那さんに家事を手伝ってもらいたい。子どもを見てもらいたい |

アルファベットは表1の対象者を意味する。

る。この結果、＜妊娠前のネガティブな印象＞と＜妊娠中の不安や心配＞は、[妊娠・出産前のネガティブな印象]としてまとめられた。また、「言うことを聞かない」、「自分の思い通りにいかなくなる」、「目が離せない」という育児において子どもが要因となる困難感、＜子どもに対する困難感＞を構成する。加えて、「家のことと子どものことで自分の時間がない」、「頻回の授乳（眠れない）」というほかの要素が要因となる困難感、＜生活面の困難感＞を構成する。この結果、＜子どもに対する困難感＞と＜生活面の困難感＞は、[育児に関する困難感]としてまとめられた。そして、[妊娠・出産前のネガティブな印象]と[育児に関する困難感]は、【子どもに対するネガティブ感情】としてまとめられた。

ii. 外的要因

外的な環境が要因であると考えられる母性意識の変化や育児困難感について、コアカテゴリーとカテゴリー、具体例などを表3に示す。

外的サポートについて、「母が話し相手になってくれた」、「出産の時についててくれた」、「旦那さんの職

場の人が話を聞いてくれる」という内容のサポートは、＜妊娠・出産時の心理的サポート＞を構成する。また、「パパに体験させたくて（パパママ教室に参加した）」、「職場の人にすごいよくしてもらった」、「家事をしてくれた」というサポートは、＜妊娠・出産時の物理的サポート＞を構成する。この結果、＜妊娠・出産時の心理的サポート＞と＜妊娠・出産時の物理的サポート＞は、[妊娠・出産時のサポート]としてまとめられた。また、「交流館でほかのママと話ができる」、「児童館で自分自身の気分転換（にもなっている）」という、育児中（現在）のサポートは、＜育児中の心理的サポート＞を構成する。そして、「両親がよく見てくれる」、「近所の人がちょっと見ていてくれる」、「児童館で保育士さんに遊んでもらう」というサポートは、＜育児中の物理的サポート＞を構成する。この結果、＜育児中の心理的サポート＞と＜育児中の物理的サポート＞は、[育児中のサポート]としてまとめられた。さらに、ほとんどの母親が、妊娠・出産時、育児中のサポートに満足していることから、[妊娠・出産時のサポート]と[育児中のサポート]は、【外的サポートへの満足】

表4 母性意識の変化と育児ストレスの要因 (母親側の要因)

| コアカテゴリー | カテゴリー | サブカテゴリー | 概念 | 具体例 |
|---------|------------|------------------|--------------|---|
| 母親側の要因 | 母性の形成 | 妊娠・出産・育児による変化 | 自分自身の変化 | A: 無理しないようになった B: 食事のこととか気にするようになる C: 食欲が増えた E: 肌質や食の好みが変わった H: 時間の使い方はすごく変わった |
| | | | 生活の変化 | C: 自分のことを後回しにしている D: 行く場所やテレビも子ども中心 I: 友だちと遊びに行く時間が減った・寝なくて平気になった・規則正しい生活になった J: 引越して近所の子と遊ぶようになった。子どもが変わると自分の生活も変わる |
| | | | 母親としての実感 | B: 頼りにされている時 C: お腹が大きくなってくると実感。おっぱいあげてる時は私にしかできないことだから D: ママって言うってくれる時 G: 一人で外出しても一時も忘れられない。一人になりたいと思ってもやっぱり心配な自分がある I: おむつ替えや世話してる時。一緒に遊んでる時 J: 全部自分のことを差し置いて子どものこと |
| | 母親のパーソナリティ | 妊娠・出産前からパーソナリティ | 長所 | A: 穏やか D: 社交的 F: 明るい I: マイペース J: 人見知りがない |
| | | | 短所 | A: 人見知り B: 気が短い D: 悩みやすい G: 心配性 |
| | | 子どもと比較されるパーソナリティ | 類似点 | B: 人見知り B・D: 音楽が好き F: お調子者 |
| | | | 相違点 | B: 激しい遊び・乱暴 C・I: 旦那さんに似ている |
| | | 出産後のパーソナリティ変化 | ポジティブな方向への変化 | D: 一段と社交的になった E・G: 我慢強くなった H: 子どもにやさしくできるようになった |
| | | | ネガティブな方向への変化 | E: イライラしちゃう F: きつくなった H: 気が短くなった |
| | ストレスコーピング | ストレスコーピング | ストレスへの対処 | A: 寝る前に区切りをつける C: パパにママは大変だとわかってもらう H: 頑張りすぎないようにやっている I: すぐに切り替える J: マンションの友だちと話をする (旦那の愚痴) |
| | | | 子どもによるストレス解消 | B: 子どもと遊ぶ I: 笑ってる顔を見ると癒される |

アルファベットは表1の対象者を意味する。

としてまとめられた。

一方、「旦那さんにもうちちょっと早く帰ってきてほしかった」、「家事を手伝ってほしかった」、「コミュニケーションとれる場所があったらよかったな」というサポート不足感は、＜妊娠中のサポート不足＞を構成し、[サポート不足]としてまとめられた。また、「夫にもうちちょっと手伝ってもらいたい」、「親子ひろばとか無料だともっと使えるのに」、「児童館に保育士さんがいる時間が短い」という育児中における家族や公共機関・サービスへの不満は、＜他者への不満＞を構

成し、[育児中の不満]としてまとめられた。加えて、多くの母親がサポート不足に対して不満感をもっていることが示されたことから、[サポート不足]と[育児中の不満]は、【外的サポートへの不満】としてまとめられた。

iii. 母親側の要因

母親が要因であると考えられる母性意識の変化や育児困難感について、コアカテゴリーとカテゴリー、具体例などを表4に示す。

母親自身の変化について、「無理しないようになっ

た、「食事のこととか気にするようになった」という変化は、＜自分自身の変化＞を構成する。また、「友だちと遊びに行く時間が減った」、「規則正しい生活になった」、「子どもが変わると自分の生活も変わる」という物理的・環境的な変化は、＜生活の変化＞を構成する。さらに、「お腹が大きくなってくると実感がわいてくる」、「おっぱいあげてる時（母親であると実感する）」、「一緒に遊んでいる時」という、母親であることを実感する場面については、＜母親としての実感＞を構成する。この結果、＜自分自身の変化＞、＜生活の変化＞、＜母親としての実感＞は、[妊娠・出産・育児による変化]としてまとめられた。また、母親としての実感は、子育てにおける変化や子どもとの関わりの中で示されることから、[妊娠・出産・育児による変化]は、【母性の形成】としてまとめられた。

母親のパーソナリティについて、「穏やか」、「社交的」、「明るい」という母親自身が自覚しているポジティブな側面は＜長所＞を構成し、「人見知り」、「気が短い」、「悩みやすい」、「心配性」という母親自身が自覚しているネガティブな側面は＜短所＞を構成する。この結果、＜長所＞と＜短所＞は[妊娠・出産前からもつパーソナリティ]としてまとめられた。また、自分の子どもに関する「人見知り」、「お調子者」という印象は＜類似点＞として挙げられ、「激しい遊び方」、「乱暴」、「旦那さんに似ている」という印象は＜相違点＞として挙げられている。このことから、＜類似点＞と＜相違点＞は、[子どもと比較されるパーソナリティ]としてまとめられた。また、「一段と社交的になった」、「我慢強くなった」、「子どもにやさしくできるようになった」という育児を通して変わったと感じている変化については、＜ポジティブな方向への変化＞を構成する。一方、「イライラしちゃう」、「きつくなった」、「気が短くなった」という育児を通して感情的になったと感じている変化は、＜ネガティブな方向への変化＞を構成する。この結果、＜ポジティブな方向への変化＞と＜ネガティブな方向への変化＞は[出産後のパーソナリティ変化]としてまとめられた。そして、これらの[妊娠・出産前からもつパーソナリティ]、[子どもと比較されるパーソナリティ]、[出産後のパーソナリティ変化]は、【母親のパーソナリティ】としてまとめられた。この結果から、母親は自身のパーソナリティについて、育児を通してもともと持ち合わせていたパーソナリティが変化したと感じていることが明らか

かとなった。

一方、育児ストレスに対して母親が行っている「がんばり過ぎないようにやっている」、「寝る前に区切りをつける」、「パパに報告して、ママは大変だとわかってもらう」という気持ちの切り替えによる対処は、＜ストレスへの対処＞を構成する。また、「子どもと遊ぶ」、「(子どもの)笑ってる顔を見ると癒される」という、子どもとの時間そのものをストレス解消と捉えることは、＜子どもによるストレス解消＞を構成する。この結果、＜ストレスへの対処＞と＜子どもによるストレス解消＞は、[ストレスコーピング]としてまとめられた。さらに、母親が自らストレス対処方法として実践していることや、子育ての中でストレス解消につながっていると感じている事柄は、【ストレスコーピング】としてまとめられた。

IV. 考 察

ここでは、インタビュー内容の分析によって得られたカテゴリーの関係性について考察する。インタビューの内容から、母親の感情や考えがほかのカテゴリーにどのように関係するのか矢印で表したものを図に示す。

まず、【子どもに対するポジティブ感情】は、【外的サポートへの満足】に関係していると考察される。事例 A, B, G は「(妊娠は)うれしかった。ずっとほしかったって思ってた、よかったなあって。子どもがほしかったのでわくわくしました」、「子ども大好き。一緒に遊ぶことに憧れがありました」、「(子どもが)大好きでした」という子どもに対するポジティブな感情を有していた。また、これらの事例は「職場の人にすごくよくしてもらった」、「母が話し相手になってくれ

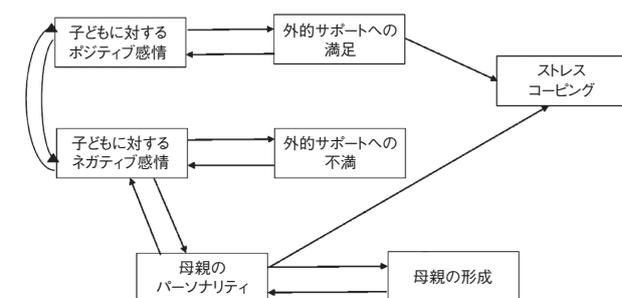


図 本研究で得られたカテゴリー間の関係性
グラウンデッド・セオリー・アプローチによって得られたカテゴリーについて、それぞれの関係性を矢印により図示したもの。

た」, 「(母や旦那が) 家事をしてくれた」, 「近所の人
がちょっと見ててくれた」という〔妊娠・出産時のサ
ポート〕, 〔育児中のサポート〕感があることが示され
た。このことから, 妊娠・出産に対するポジティブな
感情は, サポートにおける満足感を高めると推察され
る。これは, ポジティブな感情を持つ母親は, 育児に
おける困難感を解消するために積極的に行動すること
が多く, 十分なサポートがあることで子どもとの関わり
に余裕を持ち, 妊娠や育児を肯定的に捉えることが
できるという相互的な関係があるためと考えられる。
また, この結果は, 「母親が子育てを肯定的に捉える
ことで自己効力感を強め, 自己効力感の強まりが肯定
的な感情を強めることで子育ての中での満足感をもた
らす」¹⁰⁾, 「夫や自分の母親・友人とともに, 母親の
職場におけるサポートの高さが育児ストレスを軽減す
る」¹¹⁾, 「心の健康度は夫や夫以外の人からの情緒的
サポートとの関連が大きく, サポートが多いほど心の
健康度が高い」⁸⁾といった先行研究に支持されるもの
であると考えられる。

対して, 【子どもに対するネガティブ感情】は【外的
サポートへの不満】に関係していると考察される。事
例 C, H, I は「生まれたらかわいだけじゃないだろ
うな」, 「(子どもが) あんまり好きじゃなかったです。
興味ないって感じで」, 「(子どもに) 話がうまく通じな
い」という<妊娠前のネガティブな印象>や<子ども
に対する困難感>があり, 「家事の手伝いをしてほし
い」, 「夫にもうちょっと手伝ってもらいたい。旦那の
家事が中途半端」, 「旦那さんに家事を手伝ってもら
いたい。子どもを見てもらいたい」という<妊娠中のサ
ポート不足>や〔育児中の不満〕を感じていることが
示された。このことから, 十分なサポートが得られて
いないことは, 育児における困難感を増長するという
相互の関係があると推察される。これは, サポート不
足により母親が子どもと接する時間が長くなり, 子
どもに対する困難感やネガティブな感情が多くなる状
況につながりやすいためであると考えられる。また, 【子
どもに対するネガティブ感情】は【母親のパーソナリ
ティ】に関係すると考察される。事例 F, H は「(子
どもから) 目が離せない」, 「(子どもが) 好きじゃな
かった, 興味がなかった」というネガティブな感情を
持ち, 〔出産後のパーソナリティ変化〕における<ネガ
ティブな方向への変化>として「きつくなった」, 「気
が短くなった」と述べている。このことから, 育児に
おいて困難

感やネガティブ感情を持つ母親は, 育児を通しても
もと母親の持っていたネガティブなパーソナリティ
が先鋭化しネガティブな感情が目立つ, あるいはネガ
ティブなパーソナリティへと変化すると推察される。
また, これらの結果は, 「育児に対する対処不能感が
上昇するとそれにつれて育児不安も上昇する」³⁾, 「エ
ゴグラムにおいて「自他否定型」とされる群に属する
母親は育児不安が最も高く, 自己評価が低い」¹²⁾とい
った先行研究と類似するものであると考えられる。

一方, 【外的サポートへの満足】は【ストレスコー
ピング】に関係していると考察される。サポートに対
して満足感のある事例 A, B は「寝る前に区切りをつ
ける」, 「子どもとサッカーをしたりして遊ぶ」とい
う自分なりの〔ストレスコーピング〕を持っているこ
とが明らかとなった。このことから, 十分なサポートが
あることで母親自身の時間を持つことができたり, 子
どもとの時間を楽しむことでストレスを発散したりす
ることができ, それが母親自身のストレスコーピング
となると推察される。また, 【母親のパーソナリティ】
は, 【ストレスコーピング】に関係すると考察される。
事例 I, J はパーソナリティの<長所>として「のん
びりしているところ, マイペース」, 「人見知りがない」
を挙げ, 〔ストレスコーピング〕として「すぐに切り
替える」, 「マンションに友だちがたくさんいるから
旦那の愚痴とか話して, それがストレス解消になる」と
回答している。このことから, 特にパーソナリティの
長所あるいはポジティブな面において, 母親が妊娠・
出産以前から持っていたパーソナリティは, ストレス
に対処する行動を取りやすくすると推察される。これ
らの結果は, 「母親は, 産後1か月までの間, 母親の
役割を分担し負担を軽減してくれる頼りになる人を必
要として援助を求める行動をとっている」¹³⁾, 「問題へ
の対応準備を行うことで不安が軽減する」¹⁴⁾といった
先行研究に支持されるものと考えられる。

さらに, 【母親のパーソナリティ】, 【子どもに対す
るポジティブ感情】と【母性の形成】は関係があると
考察される。事例 D, G, H は「行く場所やテレビなど,
全部子ども中心になった」, 「ママって言ってくれる時
(母親だと実感する)」, 「一人になりたいと思っても
心配な自分がある」, 「(妊娠・出産前と比べて) 時間
の使い方がすごく変わった」という〔妊娠・出産・育
児による変化〕を示し, 〔出産後のパーソナリティ変
化〕として「一段と社交的になった」, 「我慢強くなっ

た」,「子どもに優しくできるようになった」という<ポジティブな方向への変化>を感じていることが示された。さらに,事例 A, B, G は「(妊娠したことで)無理しないようになったかな」,「子どもに頼りにされている時(母親としての実感がある)」,「一人で外出しても(子どものことを)一時も忘れられない。一人になりたいと思ってもやっぱり心配な自分がある」という<自分自身の変化>や<母親としての実感>があり,母性が形成されていることが示された。このことから,母親のポジティブなパーソナリティ変化や妊娠・出産・育児による母性の形成に着目すると,母親のパーソナリティと母性は育児を通して相互に関係していくと推察される。なお,本邦の先行研究では,母親のパーソナリティと母性について扱ったものが少なく,本研究において質的な側面での関係性が見い出されたことは,今後の研究をより有意義なものにすると思われる。

上述の検討から,母親のパーソナリティは子どもに対するポジティブ・ネガティブな感情や母性と関係すると考察される。そして,母親のパーソナリティが妊娠・出産・育児を通して変化することで母性意識が変化し,母性が形成されると考えられる。一方,一般的に育児ストレスの要因として挙げられているサポート不足は,母親のパーソナリティと直接的には関係しなかった。しかし,周囲からのサポートは子どもに対するポジティブ・ネガティブ感情と関係し,それらの感情が出産後のパーソナリティ変化や母性形成と関係していくと推察される。

V. 結 論

本研究の結果から,母性は子どもに対するポジティブ・ネガティブ感情が母親のパーソナリティに影響を与え,形成される可能性が示唆された。一方,母性の形成と育児ストレスに直接の関係性は見い出せず,一般的に育児ストレスの要因として挙げられているサポート不足は,母親のパーソナリティと関係するとは明示されなかった。しかし,十分なサポートがあることで妊娠や育児を肯定的に捉えることができるという相互的な関係が示された。また,サポート不足により子どもに対する困難感やネガティブな感情が多くなりやすい状況につながることを示された。これらの結果から,母親が子どもや育児に対してポジティブな感情を持つためには,母親の求めるサポートの充実が重要であると考察される。

なお,今回の調査では,対象者がインタビューを受けることに積極的であり,また,経済状況や育児環境が整っている母親が多く,養育環境が要因となるような育児困難感を聞き出すことが容易ではなかった。しかし,育児環境が整っていない,あるいは育児に対して否定的な感情を持つ母親にインタビューすることは難しく,質的な調査としての限界が感じられる部分もあった。また,インタビューの内容について,第1子と第2子以降をもつ母親のストレスについて差別化を図ることができなかった。今後は,その違いについても検討できるよう,内容を深める必要があると考えられた。さらに,今回の研究では,先行研究と同様の結果が示されなかった部分があった。これについて,インタビュー内容に偏りが出ないよう配慮しながら調査を継続する必要があると思われる。

本論文の作成にあたり,ご指導を賜りました金城学院大学人間科学部の宗方比佐子教授に感謝致します。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 鳥澤ゆい. 育児ストレスを抱える母親へのサポートに関する検討—先行研究の動向をもとに—. 金城学院大学大学院人間生活学研究科論集 2014; 14: 29-41.
- 2) Vicary JR, Corneal DA. A comparison of young women's psychosocial status based on age of their first childbirth. *Family & Community Health. The Journal of Health Promotion & Maintenance* 2001; 24 (2): 73-84.
- 3) 輿石 薫. 育児不安に影響を与える要因についての縦断的研究—予期不安尺度と期待感尺度の作成—. 小児保健研究 2002; 61 (5): 686-691.
- 4) Mulrow M, Caldera YM, Pursley M, et al. Multilevel factors influencing maternal stress during the first three years. *Journal of Marriage and the Family* 2002; 64 (4): 944-956.
- 5) 村上京子, 飯野英親, 塚原正人, 他. 乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の分析. 小児保健研究 2005; 64 (3): 425-431.
- 6) 山口さつき, 平山恵美子. 出産体験の自己評価に影響を及ぼす要因. 母性衛生 2011; 52 (1): 160-167.
- 7) 荒牧美佐子. 育児への否定的・肯定的感情とソーシャ

ル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から—. 小児保健研究 2005; 64 (6) : 737-744.

- 8) 西出弘美, 江守陽子. 育児期の母親における心の健康度 (Well-being) に関する検討—自己効力感とソーシャルサポートが与える影響について—. 小児保健研究 2011; 70 (1) : 20-26.
- 9) 堀内美佐, 室田千亜紀, 嶋貫利香, 他. 家族のサポートと妊婦の母性意識の発達. 母性衛生 1996; 37 (2) : 293-298.
- 10) 藤井加那子, 永井利三. 育児期にある母親の育児満足感に影響する因子: 子育て不安の認識の有無による違い. 小児保健研究 2008; 67 (1) : 10-17.
- 11) 酒井 厚, 松本聡子, 菅原ますみ. 就労する母親の育児ストレスと精神的健康: 職場も含めたソーシャルサポートとの関連から. 小児保健研究 2014; 73 (2) : 316-323.
- 12) 喜多淳子, 田中恵子, 坂間伊津美. 育児期の母親の自我状態, 育児不安, 及び自己評価 (第1報) —エゴグラム・プロフィール・パターンと育児不安, 及び自己評価との関連—. 母性衛生 2001; 42 (4) : 806-813.
- 13) 永田真理子, 仲道由紀, 野口ゆかり, 他. 産後1ヵ月時・4ヵ月時点の母親の育児ストレスコーピング方略—育児生活肯定的感情に焦点をあてて—. 母性衛生 2011; 51 (4) : 609-615.
- 14) 藤本 薫, 鳥袋香子, 高橋真理. 育児生活のコーチ

ングが褥婦の情緒的側面に及ぼす影響. 日本女性心身医学 2006; 11 (3) : 243-249.

[Summary]

The goal of this research was to examine how childbearing, childcare and childcare support affect a mother's personality and her maternal consciousness. Semi-Structured interviews were conducted with 10 mothers of children aged between 0 and 3 years. And, it was analyzed by Grounded Theory Approach. Results indicated a relation between mother's personality and negative feelings towards a child and motherhood. In addition, participants' sense of motherhood was shaped by feelings towards their children; their personalities also changed through childcare. In contrast, mother's personalities were not related to lack of childcare support or the associated parenting stress but good support was related to positive/negative feelings towards the children. These feelings in turn are related to changes in the mothers' personalities after childbearing and entering motherhood.

[Key words]

motherhood formation, childcare support, stress coping, mother's personality, Grounded Theory Approach